

### Ⅲ わらじ村長 鎌田三之助の挑戦

---

#### 2 明治 42 年事務報告—『村の模範とならん』—

疲弊困窮の極にあった鹿島台。その村長に就任するにあたっての一大決意を示した事務報告。

町史では、次のように紹介されている。

「豊かで平和で強健な村とするため、諸神を合祀して（旧村の 14 社を鹿島台神社として合祀）村民ともども神前に誓い、村長自身は村の模範となり、村長に接する者をことごとく感化するために、自分の毎日の行動に誤りなきことを期そうとの一大決意」

\*

#### 明治四十二年事務報告

吏は其の職に叶い、民は其の業に安んじたる往時の本村は、唯に歴史によりて之を知るのみにして、今や全く其の象を止めず、吏は徒に自家の栄華を図りて其の民を犠牲とし、民は慢りに参政の権利を弄びて其の業を放棄す。前者は我利を駆り、後者は空想に走るもの、焉ぞ公共の秩序を保持するを得んや。

財政の月を経るに従いて紊亂し、政権の争年を逐うて激烈を加うるもの、蓋し偶然に非ざるなり。斯の如くにして推移せんか、村を挙げて祝福は家を去り、栄光は門を出ずるの日必ず遠きに非ざるべし、嗚呼村治の患ならずや。之を矯正し之を救済せんとせば、須らく其の原因を研めざるべからず。

抑も本村の斯く歎ずべく患うべき悲境に沈淪せし所以のものは、如何なる遠因、数岐なるべしと雖も、薄弱なる時代思潮の文化は全く教育訓練にありとなし、偏えに之にのみ信賴し、却て其の源泉たり根底たる所の信仰心を欠くに至りしもの、慥に其の一たらずんばあらず。顧うに維新の初年、神祇省が神仏混合を禁じ、或は神社と神道とを別ちたるが如き、時勢の変遷より遂に神仏に対する觀念に乏しく、時々敬虔を欠き、或は全く之を無視し、信仰殆んど稀なるに至りたりき。豈危険の極ならずや。

仮令、文明と呼び開化と叫ぶも、信仰にして欠くところあらんか、そは皮層の文明のみ、皮層の開化のみ、健全なる文明にあらず、健全なる開化にあらず、見るべし、現今犯罪の多くは学者又は仮粧政治家あるを。又、翻りて古来名君賢相の治績を閲すれば、多くは神仏を信仰し、事をなさんとすれば必ず先ず之に誓い、其の熱誠なる信仰は遂に己に克ち時に勝てり。

龜山天皇の身を以て困難に代らんことを祈り給い、立どころに元兵十余万を麤殺し、国土を保安せられしが如き、上杉鷹山、白河楽翁の身を質として神に祈り、一藩百年の基礎を立てたるが如き皆これなり。信仰の効果また偉大ならずや。要するに信仰は真率なる精神の骨髓なり。

精神既に真率ならんには、百般の成功素より容易なるべし。古語に曰く、精神一到何事かならざらんやと、宜なるかな。精神的事業に対する物質的事业は、其の進行、其の向上、<sup>あたか</sup>宛も影の形に従うが如くなるのみ。

結局、本村の急務は、村民の頭脳を感化するにあり。即ち村長自身の行動を以て村の範となし、彼の化石谷に入るものは、其の動物たると、植物たるを問わず、悉く之を化石し去るが如く、村長に接するものの悉くは、斯く感化せしめんことを欲し、日夕行動を<sup>あや</sup>憚らざらんことを期す。

就任先ず諸神を合祀し、大事は村民一統と共々神前に誓い、如めて之を決行するもの、また信仰上に於ける範を示さんとするに外ならず。

以上は、精神的事業の重なるものにして、物質的事业の経営は村治大要と題し、別紙に掲げ、茲に之を報告す。

明治四十三年三月十六日

鹿島台村長 鎌田三之助

(注) 原文は、漢字カタカナ文。ここでは読みやすいように、カタカナ部分をひらがなに置き換えています。

<出典>

鹿島台町史



▲鹿嶋臺神社（明治42年11月10日に14神社が合祀・遷宮された。）